

# 第4章

# 高野町の歴史



## 空海以前の高野山

### 大昔の高野山

紀の川のほとりに人が住みついたのは、数千年も前のことです。橋本市や九度山町の台地からは、石の矢じりや斧など、縄文時代の石器が発見されています。また、橋本市には弥生時代に人が住んでいたムラのあとも残っています。

いっぽう、人の住みにくい山奥にある高野山には、この時代に人が住んでいたことがわかる遺跡は見つかっていません。



大門から見える山やま



丹生都比売神社

### 丹生都比売神社と高野山

大和朝廷によって日本が統一され、政治のしくみが整った7～8世紀頃には、丹生氏という一族がこの地方を治めていました。かつらぎ町天野にある丹生都比売神社は、丹生氏が自分たちの祖先として、また、土地の守り神としてまつった氏神でした。

高野町の各大字にある氏神を調べてみると、ほとんどが丹生都比売神社と深いつながりがあることがわかります。このことから、9世紀の初め、空海によって開かれるまで、高野山は丹生氏の支配を受けていたと考えられます。

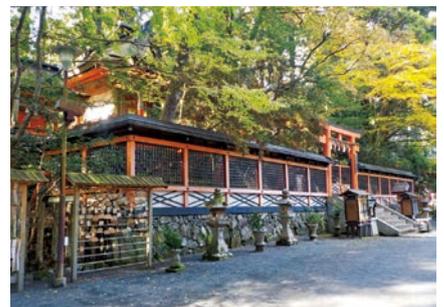
また、空海は、高野山を開いた後も、山の守り神として丹生明神と狩場明神を伽藍の中にまつりました。

そのころ、山のふもとでは限られた地域に人が住み、農業や狩りなどによる昔ながらの生活を行っていました。

### 高野町各大字の氏神

高野山	★	丹生高野明神社
西郷		八幡神社
細川		八坂神社
花坂		鳴川神社
湯川	★	丹生神社
相ノ浦	★	丹生神社
大滝	★	丹生高野明神社
西ヶ峰・南・林	★	丹生神社
平原・檜原		
杖ヶ藪・東又	★	丹生神社
東富貴	★	丹生神社
西富貴	★	丹生神社
上筒香	★	丹生神社
中筒香・下筒香	★	丹生神社

★印が丹生明神をまつっている神社

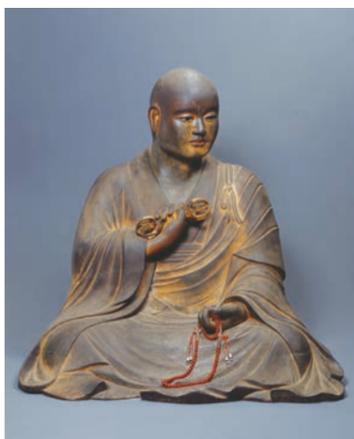


壇上加藍の丹生高野明神社

## 空海の活躍

### 求道の青年時代

空海は774（宝亀5）年に讃岐国（今の香川県）の豪族の家に生まれ、小さい頃は真魚という名前でした。15歳で都に出て儒学を学び、18歳で大学に入学し、異例の出世を果たします。当時の大学は役人になって出世をめざすための学校でしたが、空海は役人になることを喜ばず、仏教に深く心を惹かれ、19歳で大学をやめて仏の道へと進みます。



弘法大師坐像（萬日大師像）  
金剛峯寺

### 真言密教との出会い

仏教の修行を続けていた空海は、大和国（今の奈良県）の久米寺で、密教の根本教典「大日経」を見つけましたが、直接の伝授でないとわからないことが多かったため、唐（今の中国）へ行く機会を求めていました。そして、804（延暦23）年、空海が30歳の時、最澄（伝教大師）らと同じ時期に遣唐使船に乗って、唐（今の中国）へ渡る機会を得ました。空海は、唐の都の長安で、青龍寺の恵果和尚から真言密教の教えを受け、2年後に日本に帰ってきました。

### 高野山を開く

空海は、教えを広めて人びとの心を救うこと、仏教の力で国を守ることを願いとして、人里離れた山の上に寺を建てようと決心しました。

816（弘仁7）年、嵯峨天皇は空海に伽藍の建設を許しました。それは、唐から帰って10年目、空海が42歳の時でした。

835（承和2）年、62歳の時に空海は高野山で入定し、その後、醍醐天皇から弘法大師の名が贈られました。

**入定**  
弘法大師空海が、生死の境を越え永遠の瞑想に入っていること

### すぐれた文化人

空海は宗教家としてだけでなく、あらゆる面で平安時代初期を代表する文化人でした。唐で学んだ新しい知識をもとに、社会のため、人びとのために優れた才

能を発揮しました。

中でも香川県の満濃池の修築工事では、水圧に対してアーチ型の堤防を築くための技術指導をし、現在に至るまで利用されています。この他にも道を開き、橋を架け、井戸を掘り、温泉の効用を教え、漢方医学の知識を授けたなどのいい伝えもあります。

空海は、文化史上最大の功労者でもあり、多くの著作を残しています。『三教指帰』『性霊集』などは、詩・文章ともに日本文学において高い評価を得ています。

また、中国語や梵語など語学にも造詣が深く、書道では三筆の一人として、美術においては弘仁期以降の仏像や仏画に影響を与え、建築においても同様でした。

さらに、日本最初の庶民教育機関「綜芸種智院」を京都に開き、教育の機会均等を実現しました。

## 空海以降の高野山

### 平安時代の高野山

高野山を開くことは、とても困難な作業でした。空海は弟子の実恵や円名らを派遣して、壇上伽藍の建設事業をはじめました。816（弘仁7）年に着工した根本大塔は、887（仁和3）年に完成しました。それは、空海が入定されて約50年後でした。

その後10世紀になって、高野山は一時的、とても荒れはてたことがありましたが、まもなく藤原道長らの助けにより栄えていきました。11世紀から約100年間は、高野山の歴史の中で最も華やかな時代でした。道長やその子頼通らが、優雅な行列をつらねて高野山へ登ってきました。白河上皇や鳥羽上皇も何度も高野山へお参りになりました。



根本大塔

**根本大塔**  
根本大塔は、壇上伽藍の中でもっとも重要な建物です。たびたびの火災で焼け、今の建物は6代目です。1937（昭和12）年に完成し、高さは48.5mあります。

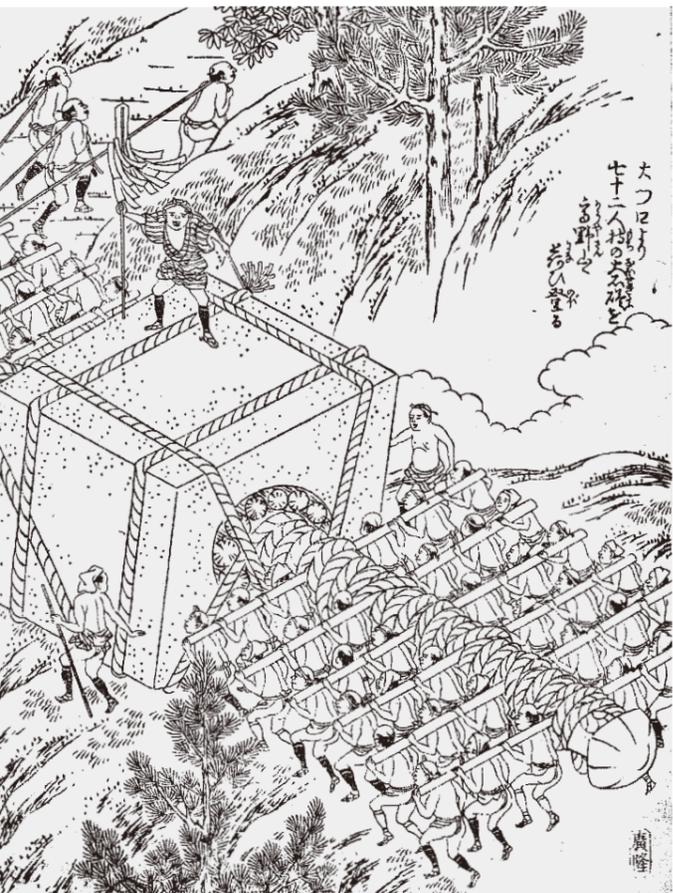
**上皇の登山**  
白河上皇は4度、鳥羽上皇は3度も高野山を参拝されました。



法皇の高野山参詣のようす 『紀伊国名所図会』より

※文章の解説

弘法大師は今もなお高野山奥之院の御廟内に生身のままでおられ、人びとを救済し続けている。高野山に参詣して弘法大師とご縁を結ぼうと、白河上皇、堀河院、鳥羽上皇は、天野より奥之院まで一步三礼して参詣された、という。



高野山への墓石運びのようす 『紀伊国名所図会』より

高野山への参詣ルートは主に7つあり、高野七口と呼ばれています。これらの道は、現在ではその役割を失ってしまいましたが、当時は高野参りの道として、また、物資の運ばん道として大切なものでした。町石道は、小豆島（香川県）などから、水路で運んできた大きな墓石の運ばんにも利用されました。

高野山は権力者による高野参りが相次いだことなどにより、高野山の名は全国に知られるようになりました。その後、朝廷や藤原氏などから土地を何度も寄付してもらい、平安時代の終わり頃には広大な領地をもち、全国でも非常に大きな力を持つお寺となりました。

鎌倉時代の高野山

鎌倉時代になると、武士の力が大きくなり、貴族や寺院の持っていた領地は、武士にうばわれるようになりました。しかし、高野山は武士からも信仰されていたため、かえって領地が増えていきました。源頼朝の妻である北条政子や、北条時宗も高野山を助けました。政子は、頼朝のめい福を祈って金剛三昧院を建てました。

この頃、慈尊院（九度山町）から大門、壇上伽藍を通過して奥之院に至る参詣道には、道しるべとして1町（約109m）ごとに町石が建てられました。



道しるべとしての町石



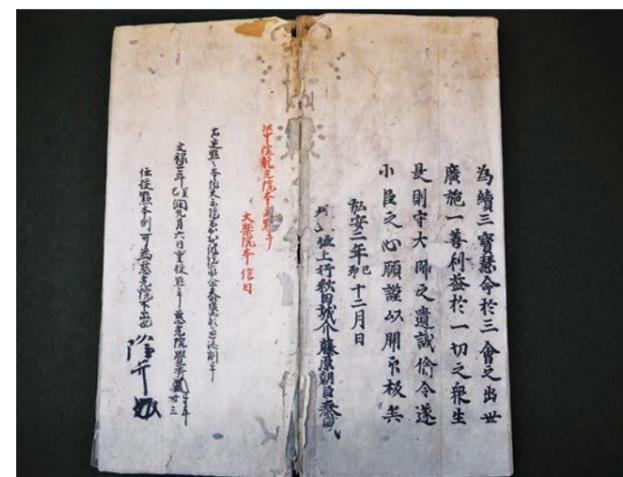
金剛三昧院



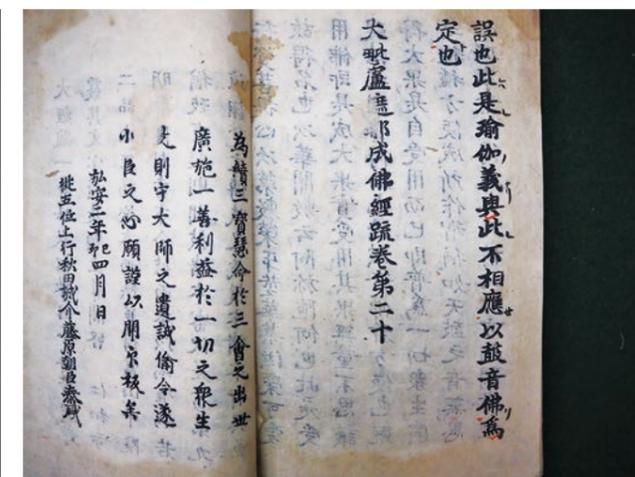
金剛三昧院 多宝塔（国宝）

鎌倉時代から室町時代にかけて、高野山では学問がさかんになり、すぐれた学問僧が多くでました。また、高野版とよばれる「金剛頂経」や「大日経疏」などの仏教書もたくさん出版されました。

**高野版**  
高野版に記載されている「秋田城介藤原朝臣泰盛」は、鎌倉幕府の有力御家人の安達泰盛のことです。泰盛は私財を投じて高野版の刊行に尽力したほか、町石の造営にも援助しました。



『金剛頂経』（高野版／高野山大学図書館所蔵）



『大日経疏』（高野版／高野山大学図書館所蔵）

## 室町時代の高野山

約60年に及ぶ南北朝の内乱の時代には、北朝も南朝も高野山の力を恐れ、味方に付けようとしたのですが、高野山は中立を守りました。

室町幕府も高野山を保護し、その後も各将軍の参詣が相次ぎました。中でも足利義満（三代将軍）による参詣は、最大の規模であったといわれています。

16世紀後半の高野山は17万石以上の領地と3万人あまりの僧兵を持ち、大名と同じくらいの勢力がありました。

### 石 (こく)

石 (こく) とは米の量を表す単位で、1石は成人男性が1年間に食べる米の量を表します。当時は、領地の広さをそこでとれる米の量で表していました。

## 安土桃山時代の高野山

全国統一事業を進めていた織田信長は、大きな勢力を持っている高野山のことをきらって攻めました。1581（天正9）年9月から翌年5月にかけて、高野山の周囲で激しい戦いが続けられました。

1582（天正10）年6月、信長が家来の明智光秀に殺されたため、戦いは終わりました。

信長の後を受け継いだ豊臣秀吉は、高

野山が命令に従わないので、攻め滅ぼそうとしました。根来寺を焼き討ちにし、熊野を降伏させた秀吉は、1585（天正13）年7月、高野山に大軍を差し向けました。秀吉の大軍を相手に、今度こそは高野山もあやうく見えてましたが、木食応其の努力によって焼き討ちだけはまぬがれました。しかし、領地は2万1,000石に減らされ、武器を捨て修行に励むことを約束させられました。

応其は秀吉の焼き討ちから高野山を守ったので、高野山の恩人として敬われました。応其は紀の川に橋をかけたり、多くのため池を作ったりして、人びとのために尽くしました。秀吉も応其を通して、高野山を保護し大切にしました。

### 応其 (1536~1608)

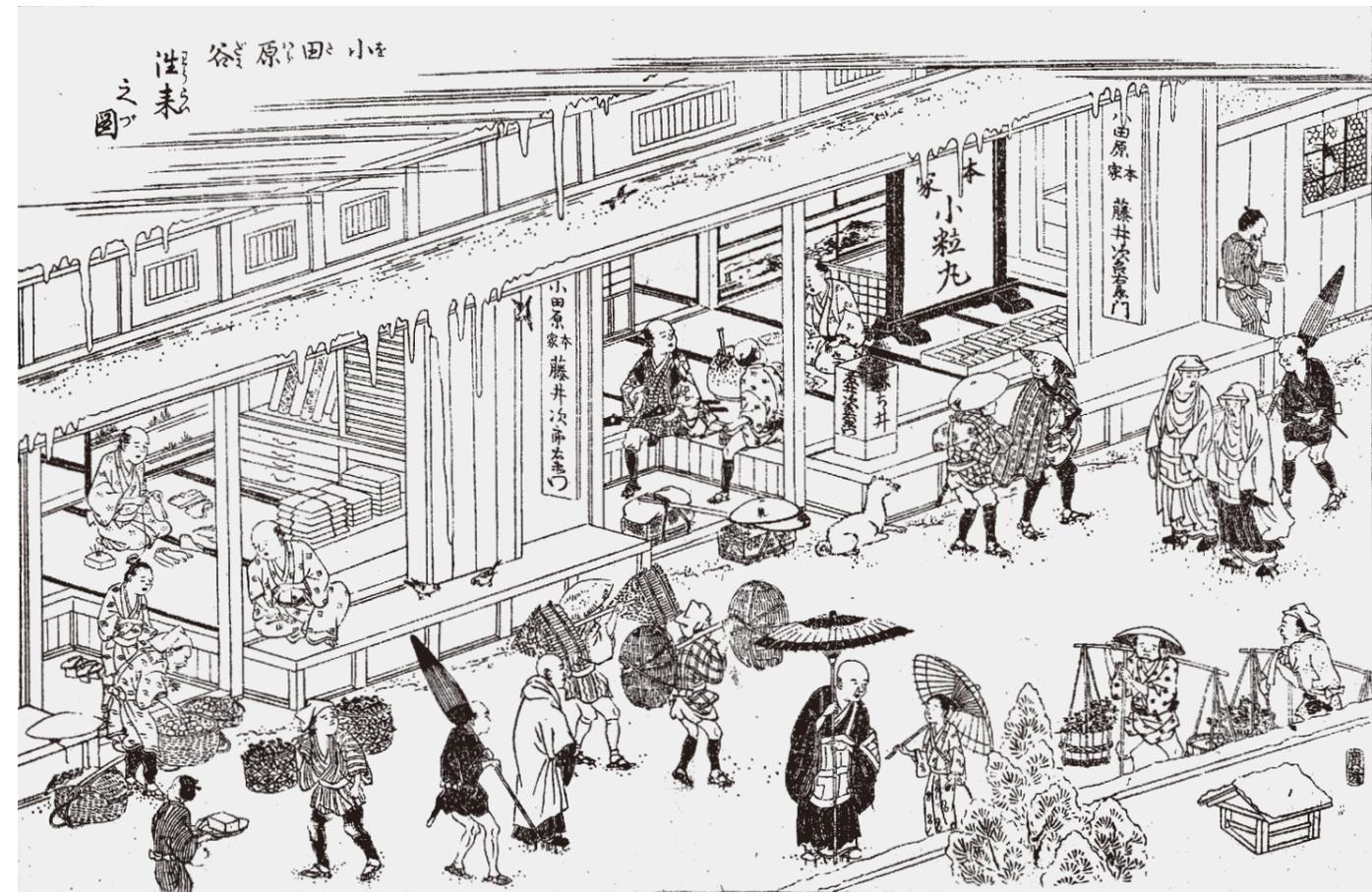
応其は安土桃山時代の真言宗の僧侶です。十穀を絶つ木食行を行ったため、木食応其と呼ばれています。

## 江戸時代の高野山

江戸時代になっても、秀吉に認められた寺領2万1,000石はそのまま受け継がれ、高野山は幕府の保護を受けました。特に、日本中の大名が高野山の寺の信者になったため、大変栄えました。17世紀の中頃には、寺の数が2,000余りもあったということです。全国的に有名になった高野山は、多くの参詣者を集め、土産物店などが繁盛しました。



徳川家の葵紋 (蓮花院正面)



江戸時代の高野山小田原谷商店街のようす 『紀伊国名所図会』より

江戸時代の高野山は、伊都、那賀、有田などに約80の村を領地に持ち、そこから年貢が納められました。このように高野山は大名と同じような力を持っていました。これに対して、勢力が強大になることを恐れた幕府によって、高野山はきびしい統制を受けました。この時代に所有していた領地は、明治時代になると国のものになりました。



奥之院の参道

奥之院の参道の両側には、20~30万基ともいわれる墓石があります。その中には900年も前に建てられたという古いものもありますが、大きい墓石のほとんどは、江戸時代に建てられたものです。

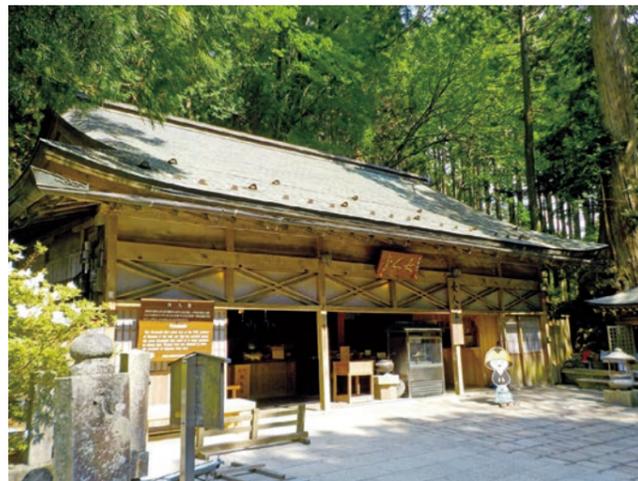
中でも、一番石塔と呼ばれる、徳川秀忠夫人のお江さんの墓は大きくて有名です。



奥之院の墓石

江戸時代の高野山は、まだ厳しい修行の山で、女人禁制でした。女性は、山の入口にある女人堂から中へ入ることは許されず、高野山には男性だけが住んでいました。僧の食事の世話や裁縫をするのも男性でした。

**女人禁制**  
宗教修行の地域や霊場などへの女性の立ち入りを禁止すること



女人堂

## 明治時代以降の高野山

1872（明治5）年には、女性が高野山に登ってもよいという国の許可が出ました。しかし、高野山には山規という厳しい掟があり、女性と7歳以下の子どもは、山に住むことは許されませんでした。この山規がなくなったのは1906（明治39）年頃で、性別や年齢にかかわらず、誰でも自由に住めるようになりました。



空から見た高野山（金剛峯寺が中心の門前町）

1884（明治17）年頃の高野山には、430余りの寺と150戸ほどの民家がありました。しかし、それらの民家の土地はすべて自分のものではなく、寺から借りたりしたものでした。90人ほどいた商人も、寺の門前を借りて店を出したり、行商にまわったりしていました。

1888（明治21）年に高野山で大火事があり、多くの寺が焼けましたが、その後、新しい町づくりが行われました。寺の数を123に統合し、新しい道路が作られ、商人は自分の店を建てました。今の高野山の形は、この時にできたものです。

交通が便利になるにつれて、高野山へ来る人が増えました。明治時代の後半には、全国各地から団体で高野参りをする人が多くなりました。商店もそれらの人びとを相手に、土産物や食べ物を売る店も多くなりました。また、参拝客はお寺に宿泊したので、米屋、酒屋、八百屋など、食材を取り扱う店が増えました。こうして、高野山には高野参りの人びとを相手に生活する人が多くなり、門前町として発達しました。



高野山の中心小田原通りの商店街

第2次世界大戦の頃、海軍航空隊が高野山に置かれ、宗教のまちが軍人でいっぱいになったこともありました。

1929（昭和4）年には極楽橋駅まで電車が通り、1930（昭和5）年には高野山駅までのケーブルカーも開通しました。また、1934（昭和9）年には中の橋から橋本市まで玉川林道（現在の国道371号）が完成しました。さらに、1960（昭和35）年には高野山有料道路も完成し、高野山までトラックを使って物が運べるようになりました。1987（昭和62）年4月に、高野山有料道路は無料となり、1993（平成5）年に国道370号、国道480号となりました。道路が整備されると、電車だけでなく、観光バスや自家用車も利用できるようになりました。近年では、交通の発達により日帰りでの観光客が増えた半面、宿泊客は減少しました。



高野山開創1200年記念大法会の様子

2004（平成16）年に世界遺産に認定されてからは、国内だけでなく海外からの観光客も増えてきました。2015（平成27）年には、高野山開創1200年記念大法会が行われ、多くの人が高野山を訪れました。その時、町はたいへんにぎわいました。

## 資料

### 信仰

平安時代以降、多くの人びとが高野参詣を行い、現在でもその形は変化しながらも続いています。年間100万人を超える人びとが訪れる高野山。最近では観光を目的として訪れる人も多いのですが、季節を問わずお参りを目的として訪れる人は後を絶ちません。

いったい何が多くの人びとを引きつけてきたのでしょうか。ここでは、空海への信仰について触れてみましょう。

### 入定信仰

空海への信仰は「入定信仰」という言葉で表されます。これは「お大師さま（空海）が奥之院の御廟において、私たちのことを救い続けてくれている」という信仰です。空海が62歳で入定してから56億7,000万年後に、弥勒菩薩とともに奥之院に現れるまで、人びとを救済してくれるとい



生身供（奥之院で空海に毎日食事が届けられる）

うものです。「入定」とは、生死の境を超えて衆生救済をめざす真言密教の究極の修行を意味します。

人びとは、空海におすがりしたいと思い、お参りをしたり、奥之院にお墓を作ったりしました。

それでは、空海が修行を行った真言密教とは、どのようなものなのでしょうか。

### 真言密教

空海が唐の都で恵果和尚から授かったのが、真言密教の教えです。密教とは秘密仏教のことをいい、「秘密の仏の教え」ということです。密教の世界では、大日如来がその頂点、中心であり、大日如来こそが永遠の真理そのものだとお経に説かれています。密教の教えは、大日如来自身が説かれたものであり、とても奥が深いので、秘密になっているのだと空海によって説明されています。

密教の特徴は「即身成仏」にあります。密教以外の仏教では、人は必ず死に、また生まれ変わり、それを何度も繰り返して悟りを開くことができるとされています。しかし、密教の世界では、生きた現在のまま悟りを開き、仏になることができるといわれています。

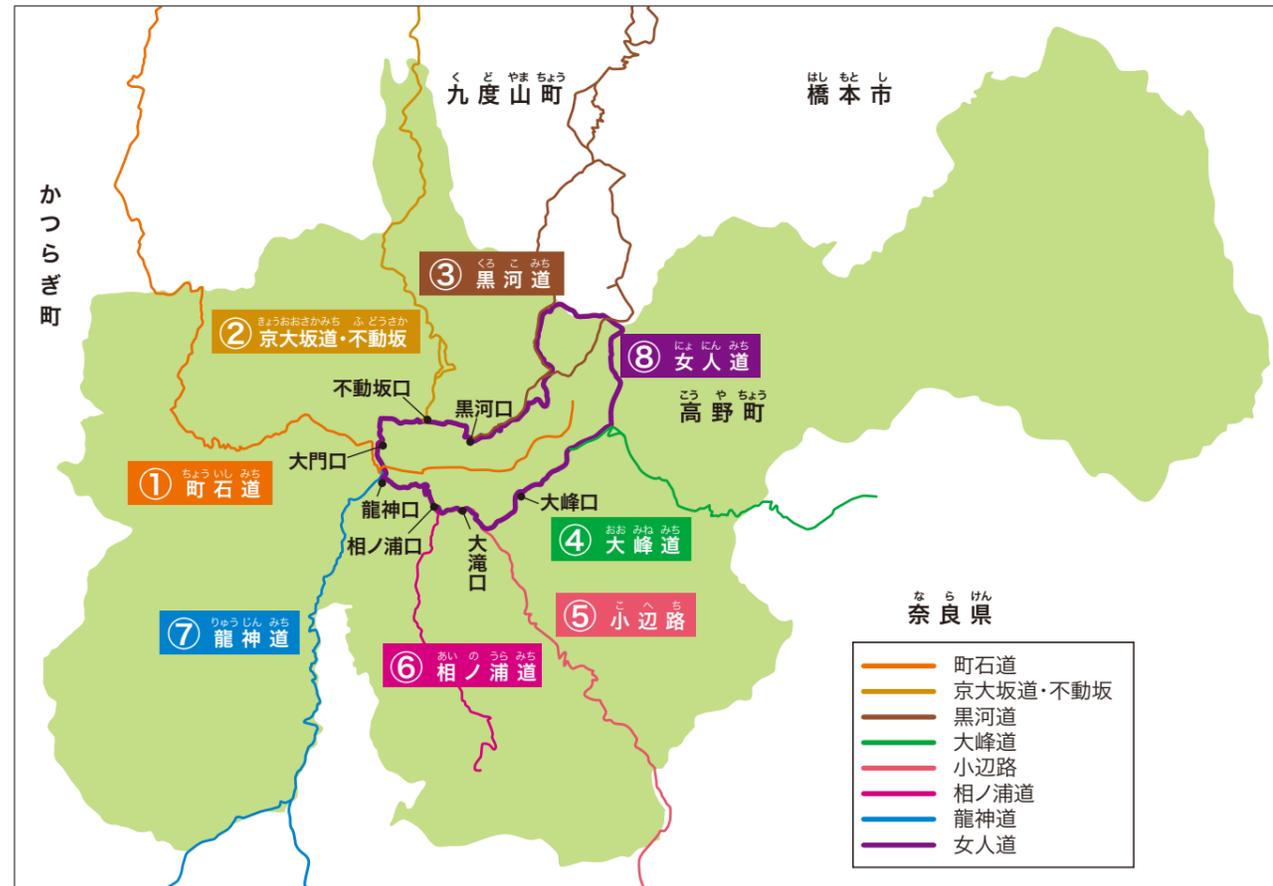
密教では「即身成仏」を達成するために真言（呪文）を唱えたり、神秘的な加持祈禱を行ったりします。

## 高野、熊野参詣道

標高800mを超える高野山へ、人びとはどのようにしてやってきたのでしょうか。ここでは、参詣に使われた道について見てみましょう。

### 高野七口と参詣道

高野山へ至る主な道が7つあり、これらの高野山側の入り口のことを高野七口と呼んでいます。そして、これらの高野七口をつなぐ高野山外周の尾根道のことを女人道といいます。



- ① 町石道 (ちょういしみち) 慈尊院と高野山を結ぶ参詣道
- ② 京大坂道・不動坂 (きょうおおさかみち・ふどうざか) 京都、大阪方面と高野山を結ぶ参詣道
- ③ 黒河道 (くろこみち) 橋本方面と高野山奥之院、千手院谷を結ぶ参詣道
- ④ 大峰道 (おおみねみち) 大峰山と高野山を結ぶ参詣道
- ⑤ 小辺路 (こへち) 熊野 (田辺市本宮町) と高野山を結ぶ参詣道
- ⑥ 相ノ浦道 (あいのうらみち) 相ノ浦と高野山を結ぶ参詣道
- ⑦ 龍神道 (りゅうじんみち) 龍神 (田辺市龍神村) と高野山大門を結ぶ参詣道
- ⑧ 女人道 (によにんみち) 高野七口を尾根伝いに結ぶ参詣道

古くからこれらの道を通して、多くの人々が高野山と各地域を行き来しました。それがどれほど大変なことであったかは容易に想像できます。

## 新しい道

昭和時代のはじめ頃、高野山まで電車やケーブルカーが開通し、自動車道も作られました。

### ① 玉川林道 (現在の国道371号)

自動車が高野山まで来ることができる道を作ること、あわせて高野地域の豊かな森林資源を開発することを目的として、1934 (昭和9) 年、5年の歳月をかけて、高野山 (中の橋) から橋本市 (向副) までの約21kmの玉川林道が完成しました。

この道ができるまで、杖ヶ藪、南、林、西ヶ峰の人びとは高野山まで荷物をかついで、病人やけが人はかごに乗せて、橋本や高野山まで運んだといわれています。自動車道の開通によって高野山への人や物の輸送は便利になりました。

### ② 高野山道路

この道は、玉川林道に代わる近代的な自動車道路として、1960 (昭和35) 年に高野山有料道路という名称で完成しました。下古沢 (九度山町) から矢立を通過して大門へとつながっています。

高野山有料道路の開通により、それまで電車だけに頼っていた参拝客は、観光バスや自家用車も利用できるようになり、参拝客の数はこれまでの2倍近くになりました。この道路をつくる主な目的は、産業開発を行うことでしたが、今では、観光道路としての役目が大きくなりました。

高野山有料道路は、1987 (昭和62) 年に無料になり、高野山道路という名称になりました。高野山道路の開通は、高野町のすがたを大きく変えました。

### ③ 高野龍神スカイライン

高野山から南へ向かうと、護摩壇山を通過して龍神温泉へと続く道があります。1980 (昭和55) 年に開通したこの道は、長さ42.7kmの山岳道路です。山頂付近からの眺めは雄大で、新緑の若葉や鮮やかに色づいた紅葉のころの景色は、とても素晴らしいです。また、時には鹿や猿などの動物が人びとの目を楽しませてくれます。

2003 (平成15) 年に無料開放となり、紀北と紀南を結ぶ観光道路として大きな発展が期待されています。



国道371号



山腹をぬう高野山道路



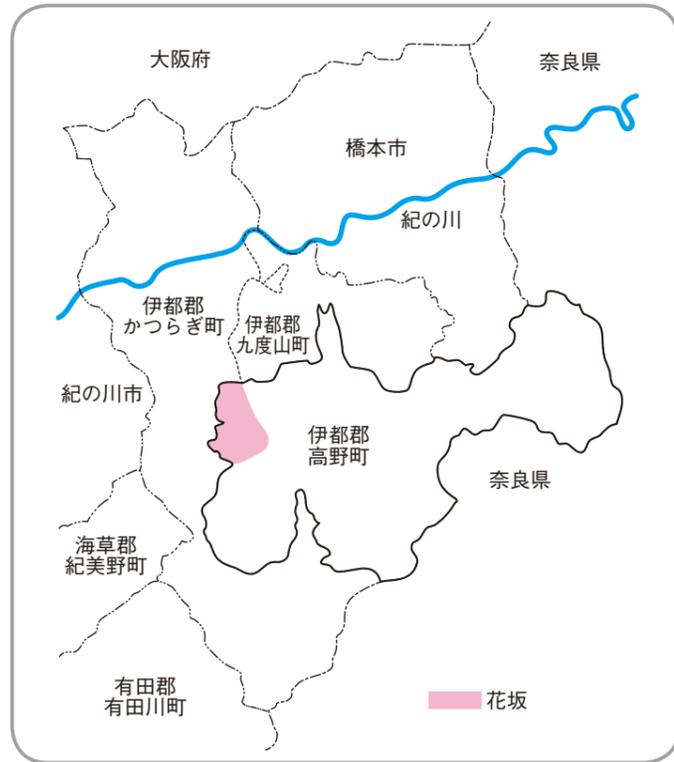
矢立の料金ゲート跡付近



高野龍神スカイライン 入口跡付近

花坂

この地の名前は、谷底から由来しています。山の岬（山の頂になる所）が、すべてこの谷に集まることから「岬底」と呼ばれるようになりました。後に名前を美しくするために花坂と改めたと『紀伊続風土記』に記されています。



花坂の区域



※宿屋の看板には、「御定宿こめや惣左エ門」と書かれています。

宿場町花坂のくらし

明治時代の中頃までは、花坂を通過して高野参りをする人が多く、花坂名物のやきもちは、ここを通る人びとに喜ばれました。その人たちが泊まる宿は花坂に10軒ほどありました。それでも客の多い季節には泊まりきれず、民家に泊まる人も多かったといわれています。

当時、花坂には旅館業、山仕事、農業などの仕事があり、900人ほどが住んでいました。

花坂から高野山へ物を運ぶときは、馬を使用しました。そのため、この地には馬が非常に多かったと、『紀伊続風土記』に書かれています。



花坂の宿屋のようす

農山村へ

1890（明治23）年6月、花坂で大火事がありました。多くの家が焼け、宿屋もほとんど焼けてしまい、花坂は大きな打撃を受けました。高野参りの人びとはほとんど花坂を通らなくなり、宿屋や茶店がつぎつぎに店を閉めました。そして、花坂は宿場としての役目を失いました。

しかし、花坂は高野町でも耕地が広く、気温が暖かいことから、農業に従事したり、国有林で木材を切り出す作業を行ったりして生活をしてきました。



現在の花坂のようす

戦後の変化

戦後しばらくは、戸数も人口もほとんど戦前と変わりませんでした。最近では急速に人口が減少し、現在では140人程度になっています。

1960（昭和35）年に高野山有料道路が全線開通し、花坂の矢立から海南市につながる県道も良くなりました。

1987（昭和62）年、高野山有料道路は県道（高野山道路）となり、無料になりました。

2007（平成19）年には志賀高野山トンネルが開通し、交通の便がさらに良くなりました。地元のさくら会は地域を活性化させるために、移住者を増やそうとする取組などを行っています。

**高野山道路**  
1987（昭和62）年、高野山有料道路の管理が国から県に引き継がれて高野山道路と名称を変え、無料になりました。



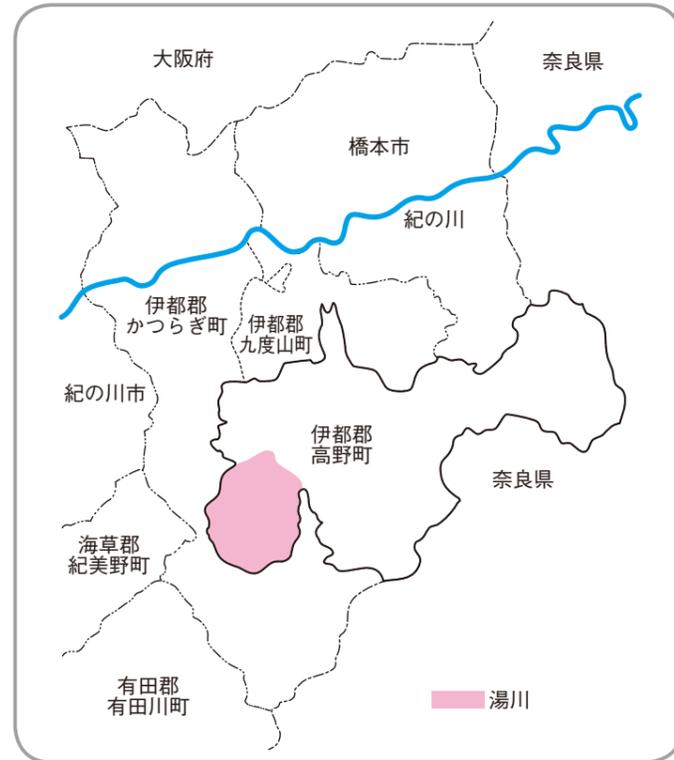
矢立の交差点

## 湯川

大字名となった湯川とは湯のわく川のこと、今でも湯子川の所どころで少量の炭酸泉がわきでています。

空海が高野山を開創する頃まで、この地には温泉があったといわれています。湯川には湯屋谷という谷があり、古い温泉のなごりだといわれています。

炭酸泉  
炭酸ガス（二酸化炭素）が溶け込んだお湯のこと



湯川ゆかわの区域くいき

## 静かな山村

湯川は昔から、他の土地との行き来の少ない、静かな山村でした。

湯川の人びとはつながりが深く、みんなで古くからいろいろな行事を行い、長く続けられてきたようです。



湯川ゆかわのようす

村の人びとは神様や仏様をまつるために、みんなが集まりました。これを講こうといいます。講では娯楽ごらくをしたり、ごちそうを食べたりする寄り合いがたびたび行われ、村の大切な行事になっていました。

湯川ゆかわは、耕地が狭く、作物の出来もよくありませんでした。周りが山で囲まれていることから、山仕事を中心となりました。山から切り出した木を使って作られた湯川炭ゆかわずみは、質の良いことでその名が知られ、湯川ゆかわの名産品めいさんひんとなりました。現在げんざい、湯川で生活する人が少なくなり、炭焼きすみやがまをする人はいなくなっていました。



かつての炭焼き窯すみやがまのあと

## 人口の減少

1958（昭和33）年、新城（かつらぎ町）から湯子川にそって、自動車が行き来できる林道かいどうが作られました。林道の開通によって、町の商人が自動車もので物ものを売りに来るようになり、生活は便利べんりになりました。しかし、この林道の開通は、湯川ゆかわの人びとの転居てんきょを進めることになり、激しい人口減少げんしょうをまねく結果となりました。

1950（昭和25）年には66戸あった家が、1989（平成元）年には24戸、2021（令和3）年には7戸となり、湯川でも他の地域ちいきと同様、人口減少げんしょうが進みました。

湯川ゆかわは山やまに囲まれ、自然のながめが美しいところところです。西の方角には天狗岳てんぐだけ（967.9m）が見え、天狗てんぐがこの山で小歌を歌って遊んだといういい伝えがあります。



湯川ゆかわから見る天狗岳てんぐだけのようす

## おおたき あいのうら 大滝、相ノ浦

昔、大滝と相ノ浦は花園荘に属していました。花園荘の13村のうち、高野町の大滝と相ノ浦を除く11村は、現在のかつらぎ町に含まれています。花園荘の村では、仏様に供える花として、八葉の櫛房花が育てられました。櫛房花は、「ハナノキ（花の木）」ともいわれることから、「花園」と名前が付けられたといわれています。

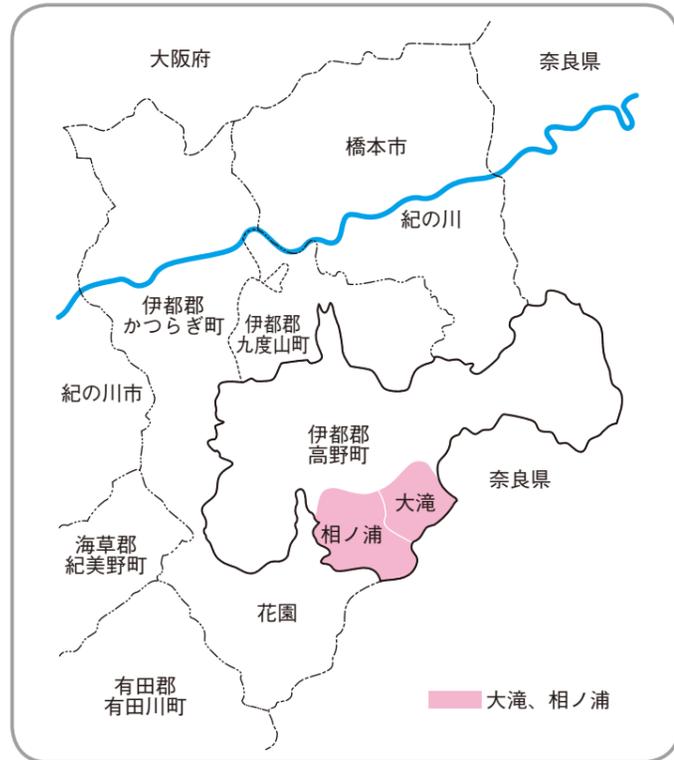
### しきみ 櫛房花

櫛房花とは、仏事に利用されることの多い植物で、美しい緑色をしています。

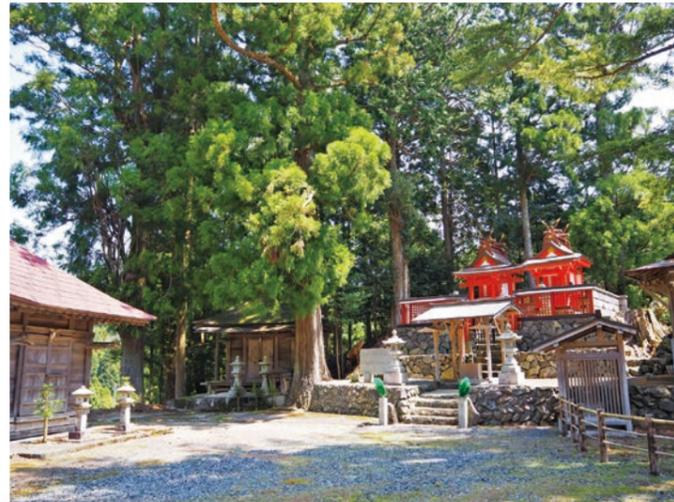
大滝は、村の北にある大きな滝に由来しています。相ノ浦は大滝と久木（かつらぎ町）の間に位置し、あい間という意味から相ノ浦と名前が付けられたといわれています。



おおたき  
大滝



おおたき あいのうら  
大滝と相ノ浦の区域



あいのうらにうじんしゃけいだい  
相ノ浦丹生神社境内のようす

## おおたき 大滝の生活

この地域には、野迫川村（奈良県）から熊野へと続く道（小辺路）があり、この道を通って、高野山と熊野を往来する人のための宿屋がありました。また、大滝には弘法大師空海が掘り当てたといわれる井戸（葵の井戸）も残っています。大正時代には人口が200人を超えることもありました。1940（昭和15）年頃、高野山から野迫川村へ行く自動車道路ができました。人や荷物は、新しくできた自動車道路を通り、多くの人が高野山や他の町へ移り住みました。

1962（昭和37）年には21戸あった家が、1989（平成元）年には9戸、2021（令和3）年には7戸となっており、大滝でも、他の地域と同様に人口減少が進んでいます。

## おおたき あいのうら はしけず 大滝、相ノ浦の箸削り

大滝や相ノ浦の人びとは、小さな水田や山の斜面を利用した段たん畑で、米や野菜などを作るほか、山に木を植えました。その木で箸やしゃくしを作り、炭も焼いていました。箸は、スギやヒノキをカンナで何度も削り、一本ずつ手作業で作りました。ここで作られた箸は高野山に運ばれ、高野山から全国に送られました。しかし、戦後になると機械で生産された安い割り箸の影響で、箸削りはだいにすたれていきました。

現在大滝では、民泊などの新たな取組も考えられています。



こうぼうだいしきうかい  
弘法大師空海の作といわれる葵の井戸



はしけず  
箸削りのようす

## 細川

細川は、昔は細川荘に属しており、北は古佐布荘（今の九度山町）と接していました。1284（弘安7）年の文書に、「細川郷」と記されているため、この頃には細川という地名があったようです。



八坂神社の大銀杏



細川ほそかわの区域くいき

細川にある八坂神社には、弘法大師空海が修行中にこの地を訪れた時、疫病が流行し、その病気を払い、農耕、歌詠みの神として、すさのおのみことをまつたといういい伝えがあります。境内には立派な大銀杏（高さ20m、直径約1.5m）があり、秋には鮮やかな黄色に色づく紅葉が見られます。

## 昔あった鉱山

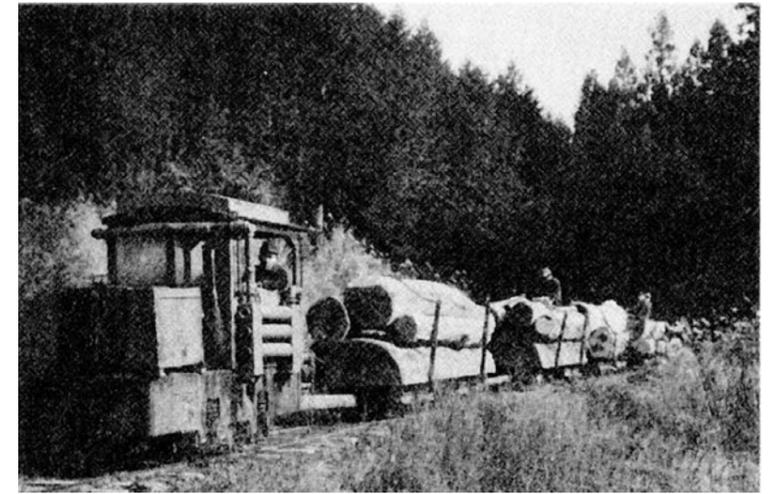
明治時代の中頃、細川の山から銅が出るのがわかり、各地から鉱山で働く人たちが集まってきました。当時は、鉱石を掘って銅を取り出すまでのすべての作業を細川で行っていました。しかし、銅が出なくなったことに伴い、鉱山は閉山しています。



細川ほそかわの風景ふうけい

## 森林鉄道の開通

1909（明治42）年に九度山町からの森林鉄道が細川を通るようになりました。そして、細川では神谷を通る本線と花坂を通る支線に分かれていました。この鉄道は、木材の輸送だけでなく、それまでほとんどの人がかついで運んでいた荷物も、この鉄道で運ぶようになりました。このことは、細川や花坂の人びとの生活をとても便利にしました。



森林鉄道

## 交通の発達と生活の変化

1927（昭和2）年、南海電鉄高野線に紀伊細川駅ができると、電車を利用して高野山に通ったり、大阪方面へ働きに出たりする人が増えました。1957（昭和32）年に紀伊細川駅から花坂の矢立までの道路が整備され、自動車も通行しやすくなりました。

現在では、西細川活性化実行委員会が中心となり、かつて細川でも漉かれていたという「高野紙」（高野細川紙）の復興や地域活性化のための取組を行っています。



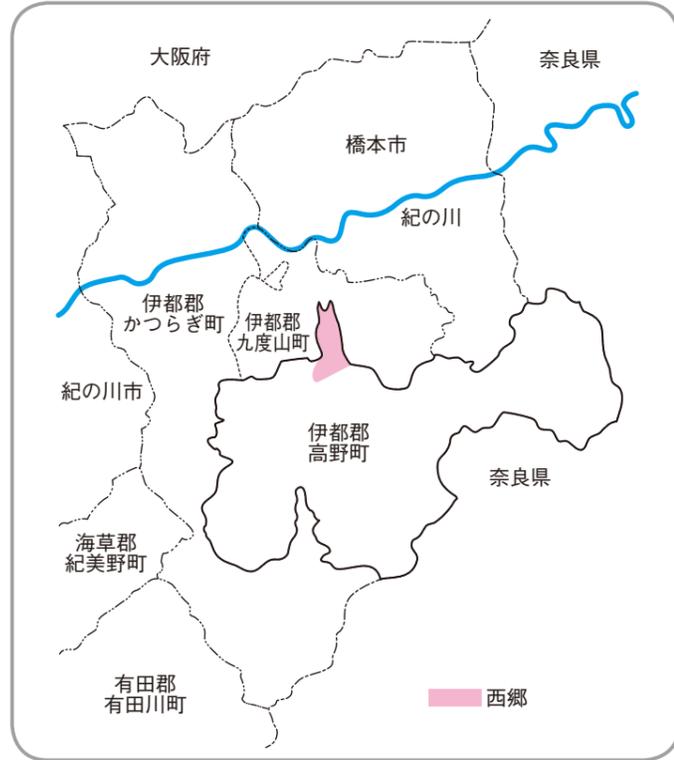
楮（和紙の原料）を蒸しているようす



紀伊細川駅

## 西郷

西郷は昔、三尾川郷に属していました。この地を流れる谷川が、楊柳山、銅が嶽、高野山から流れ出てることが三尾川の名前の由来です。西郷の神谷辻には、豊臣秀吉が高野参詣の時に建てた茶屋があったといわれています。



西郷の区域

## 神谷の全盛期

西郷の神谷は、江戸時代から宿場として栄えていました。高野参りの表口となったのは、明治時代以降のことです。明治時代の中頃から大正時代の終わり頃までが、神谷が最も栄えた時期です。

この頃、南海電鉄高野線が九度山町の椎出（現在の高野下駅）まで開通したことから、高野参りをする人のほとんどは、椎出から神谷を経て、高野山まで京大坂道を使うようになりました。高野参りの人びとは、道からあふれ出たといわれるほど、神谷はたいへんにぎわったそうです。



京大坂道



高野山への道標

## 人びとの生活

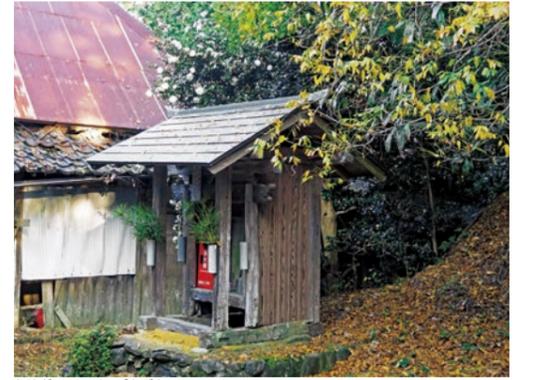
西郷の作水、尾細、桜茶屋などの地域は、高野山への参詣客の休憩所としてたいへん栄えていました。しかし、鉄道の開通により、高野参りの人びとがここを通らなくなると、これらの地域はにぎわいを失い、休憩所を閉めました。地域の人びとは神谷へ宿場の手伝いに行ったり、野菜を作って高野山へ運んだりしました。

西郷には江戸時代から地蔵堂がいくつかあり

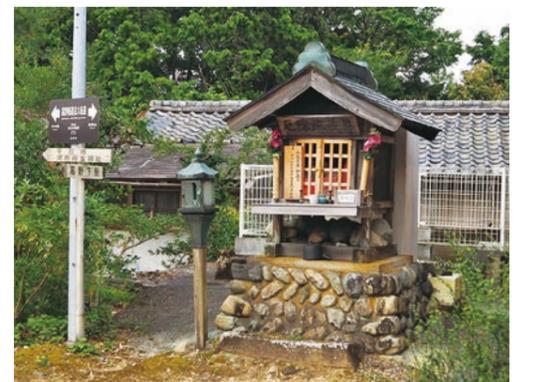
ました。今でも神谷辻地蔵堂、桜茶屋地蔵堂、作水地蔵堂が残されています。



神谷辻地蔵堂



桜茶屋地蔵堂



作水地蔵堂

## 電車の開通と宿場のおとろえ

1929（昭和4）年、南海電鉄高野線が高野下駅から極楽橋駅まで開通しました。また、1930（昭和5）年にはケーブルカーが開通し、神谷を通過して高野参りをする人はほとんどいなくなりました。神谷が宿場としての働きを失ったことで、この地域に住む人びとは、電車を利用して大阪などに勤めに行く人が多くなり、生活が大きく変化しました。

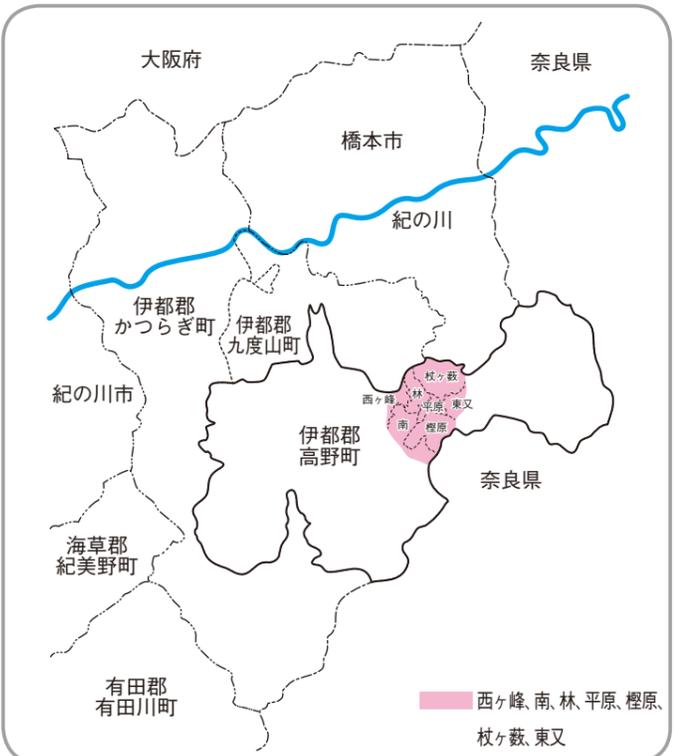
現在では、神谷の人びとが、廃校になった白藤小学校の施設を利用して、地域の活動を活発にするプロジェクトを実施し、町おこしのための取組として、カフェを開いています。



旧白藤小学校

にしがみね みなみ はやし ひらはら かしはら つえがやぶ ひがしまた  
**西ヶ峰、南、林と平原、檜原、杖ヶ藪、東又**

これらの地域は、高野三山のひとつ摩尼山の東側谷筋に位置し、摩尼荘に属していました。摩尼の名前の由来は、空海が高野山を開いた時、わざわざを取り除くため、宝の珠である「摩尼」を摩尼山に埋めたという伝説からきています。



にしがみね みなみ はやし ひらはら かしはら つえがやぶ ひがしまた くいぎ  
 西ヶ峰、南、林と平原、檜原、杖ヶ藪、東又の区域

**摩尼**  
 江戸時代における摩尼荘は九度山町域の東宿村、西宿村、市平村の3村を含めた9村から成り立っていました。現在では特に西ヶ峰、南、林の集落を摩尼と呼んでいます。

**林業が盛んなくらし**

摩尼の地域では、多くの人びとが国有林や金剛峯寺の山林で働いていました。ブリなわを使って木に登る特殊な技術は、この地域の人びとによって受けつがれてきたものです。

また、大工や左官、屋根ふきなど、高野山のお寺と結びついた建築関係の仕事をする人もたくさんいました。特に屋根ふきでは、檜皮葺きという、ヒノキの皮でお寺やお宮の屋根をふく技術が伝えられてきました。



ブリなわ



ブリなわを使って木に登るようす



みえどう ひわだぶ  
 御影堂 (檜皮葺き)

**ブリなわ**  
 木に登るときに使う縄のことで、高野山ではシュロと呼ばれる木の皮で作られることが多い。

いしがき  
**石垣のさと**

急な傾斜地にある杖ヶ藪は、ほとんどの家が石垣の上に建てられています。土地がやせ、耕地がせまいため、農業には適していませんでした。集落が存在するのは、位牌を作って高野山などに納めていたことが関係しているといわれています。

つえがやぶ  
**杖ヶ藪**  
 こうかい な つえ やぶ  
 空海が投げた杖から藪ができたので、この地を杖ヶ藪と呼ぶようになったといわれています。



つえがやぶ しゅうらく  
 杖ヶ藪の集落

にぎわったとうふ運び

杖ヶ藪は、昔から橋本市や九度山町、奈良県と人の往来がありました。明治時代のはじめ頃、この地域の人びとは、人を雇って大豆を野迫川村（奈良県）に運び、でき上がった豆腐を橋本市に運ぶといった中継ぎをして生活していました。この中継ぎの仕事で、杖ヶ藪はたいへん栄えました。

1917（大正6）年に紀和索道ができて、ロープウェイを使って物を運ぶようになり、人びとは職を失いました。

最近、地域では廃校になった杖ヶ藪小学校を一般の人に貸し出す取組が行われ、陶芸家が活用しています。

さくどう  
**索道**  
 ロープウェイやゴンドラなど、空中に吊るしたロープに輸送用機器を吊り下げて人や物を運ぶもの。

きわさくどう  
**紀和索道**  
 はしもとし つま のせがむら  
 橋本市の妻から、野迫川村の野川まで通じ、高野どうふや林産物の輸送を行っていました。杖ヶ藪にも荷物の中継ぎ所がありました。1951（昭和26）年に廃止されました。



つえがやぶ  
 もとの杖ヶ藪小学校

かみつつが なかつが しもつつが  
上筒香、中筒香、下筒香

にうがわ そ かみつつが なか  
丹生川の谷間に沿って上筒香、中  
つつが しもつつが おおあざ  
筒香、下筒香の3つの大字があり、  
これらの大字を合わせて、「筒香」  
といます。筒香の筒は狭い、香は  
川の下方向の意味で、地形の特色  
が地名の由来となっています。

ようさん さか つつが  
養蚕が盛んだった筒香

大正時代から昭和時代初期にかけ  
て、筒香では、どの家でも蚕を飼い、  
畑には蚕のえさであるクワが植えら  
れていました。この頃の筒香は、養  
蚕の村として活気がありました。し  
かし、第2次世界大戦が始まると、養蚕が衰え、ク  
ワ畑にはイモが植えられました。

現在では、みょうがや菊いもが栽培され、出荷されて  
います。



かみつつが なかつが しもつつが くいさ  
上筒香、中筒香、下筒香の区域

ようさん  
養蚕  
かに そだ まゆ  
蚕を育て、繭をとることを養蚕とい  
います。繭は絹の原料となります。



ようさん  
養蚕



かみつつが  
上筒香



なかつが  
中筒香



しもつつが  
下筒香



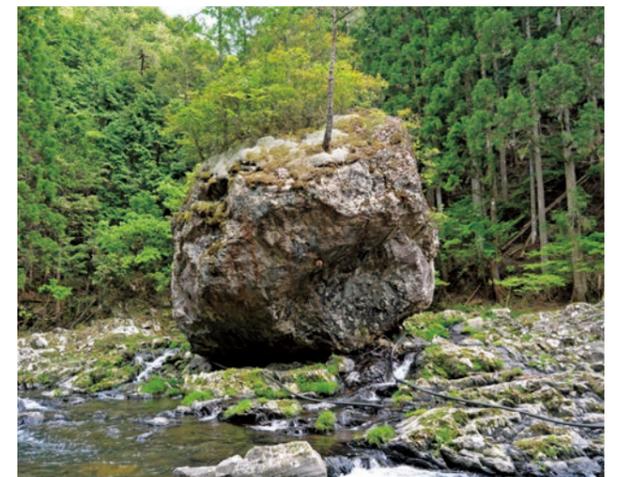
定期バスの「夢たまごハイランドタクシー」

ふべん  
不便だった交通

しょうわ  
昭和時代のはじめまで、筒香は交  
通がとても不便でした。富貴へ行く  
にも、高野山や橋本へ行くにも、険  
しい山越えの道を通らなければなり  
ませんでした。

そのため、昭和時代のはじめ頃  
から、自動車が行き来できる林道を作  
る工事がはじまりました。1936  
(昭和11)年、富貴から上筒香を通  
って、野迫川村(奈良県)までトラ  
ックが通れるようになりました。

1953(昭和28)年、この道は県道  
となり、五條市から富貴を通して上  
筒香まで、定期バスが運行するよう  
になりました。自家用車を利用する  
人が増えた今でも、五條市から下筒  
香までの間を1日4往復の定期バス  
(「夢たまごハイランドタクシー」)  
が運行し、地域住民の大切な交通手  
段となっています。



みょうじんいわ しもつつが  
明神岩(下筒香) 周囲約25mの奇岩として有名  
です。

## 東富貴と西富貴

東富貴や西富貴は高野町の東の中心地で、東は大和国（奈良県）と接しています。この地には、土佐国（高知県）のごう族の子であった犬丸寅友と安丸久光の兄弟が、熊野詣の帰りに富貴に立ち寄り、その後一族を連れ戻り、住み着いたというい伝えがあります。



名迫家（旧宅）

## 富貴の恩人、名迫伊光

富貴や筒香では、名迫家が中心となり、田畑の開発が進められました。しかし、耕地が少なく、自然の災害を受けやすかった富貴では、穀物が採れないことがたびたびありました。1718（享保3）年には、長く続いた日照りでも、一つぶの米も採れませんでした。村では3分の1が空き家になり、飢えて亡くなる人が100

人を超えました。この時名主をしていた名迫伊光が人びとを救うため、高野山に何度も足を運び、年貢を取らないこと、米を分けてほしいことを頼みました。しかし、高野山はなかなか聞き入れてくれませんでした。伊光がねばり強くお願いしたことで、高野山から米が分け与えられ、村は立ち直ることができました。その後、伊光は自分の米を村人のために積み立て、村はだんだん栄えていきました。

人びとはその恩に感謝して富貴に名迫明神社を建て、現在でも名迫伊光を大切にまつっています。また、高野山にも「名迫地蔵」とよばれるお地蔵さまがまつられています。



東富貴と西富貴の区域

### 名迫家

寅友、久光兄弟は、富貴の役人であった名迫家の先祖であるといわれています。

## 商業の中心地

道路が良くなり、交通が便利になると、街道沿いに商店ができました。明治時代の終わり頃には、店が約30軒にもなり、この地域の商業の中心になりました。

8月11日の盆市と12月25日の節季市には、約50軒ほどの露店が並びました。

盆や正月を迎えるための品を始め、食料品、日用品、服、はき物など、いろいろなものが売られ、多くの人でにぎわいましたが、平成時代になると、この市も行われなくなりました。



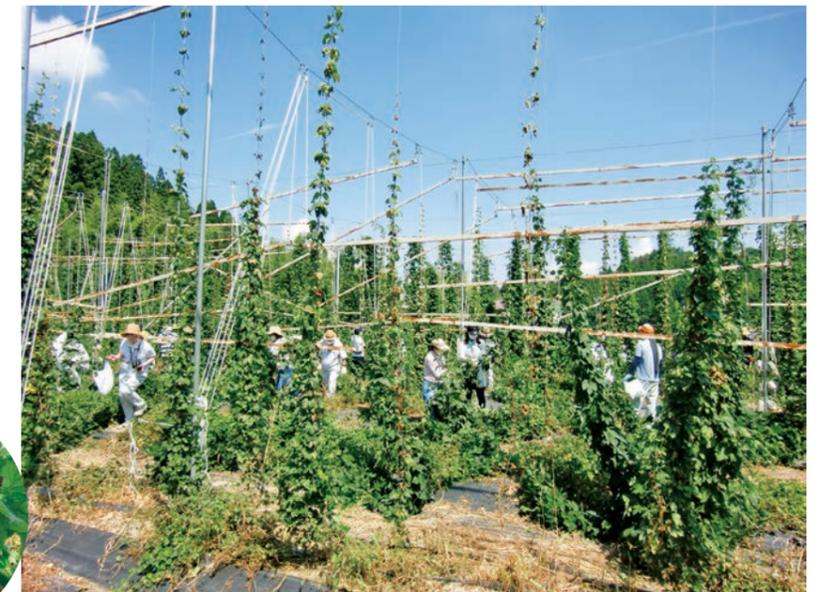
昔の富貴の市の様子

## 大火の中からの復興

第2次世界大戦中、空しゅうをさけて都会から富貴へそ開して来る人が増え、1945（昭和20）年頃には富貴の人口が2,000人を超えました。

1948（昭和23）年12月10日、大火によって多くの家が焼けました。その後の復興により道路が広くなり、かやぶき屋根が金属板ぶき屋根やストレート屋根になるなど、近代的な街に変わりました。

現在富貴では、ビールの原料であるホップが栽培されています。このホップを使って生産された地ビールは、高野町のふるさと納税の返礼品に使われるなど、地域の活性化につながっています。

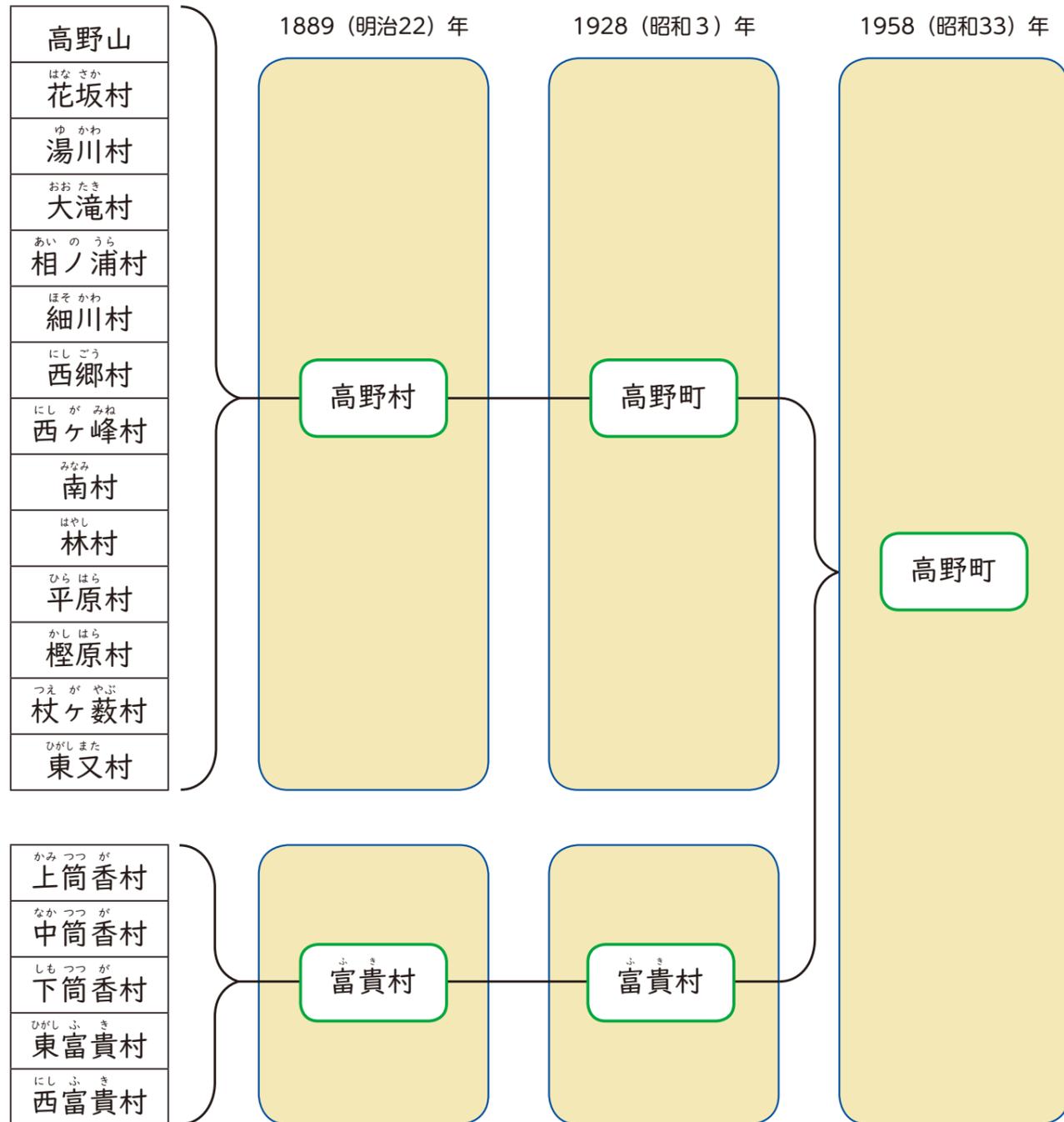


ホップの収穫祭

げんざい 現在の高野町になるまで

1889 (明治22) 年の市制町村制の施行により、高野山、花坂村、湯川村、大滝村、相ノ浦村、細川村、西郷村、西ヶ峰村、南村、林村、平原村、檜原村、杖ヶ藪村、東又村は、高野村となり、上筒香村、中筒香村、下筒香村、東富貴村、西富貴村は、富貴村となりました。

1928 (昭和3) 年には、町制が施行され、高野村は高野町となりました。そして、1958 (昭和33) 年、町村合併促進法によって高野町と富貴村が合併し、現在の高野町が誕生しました。

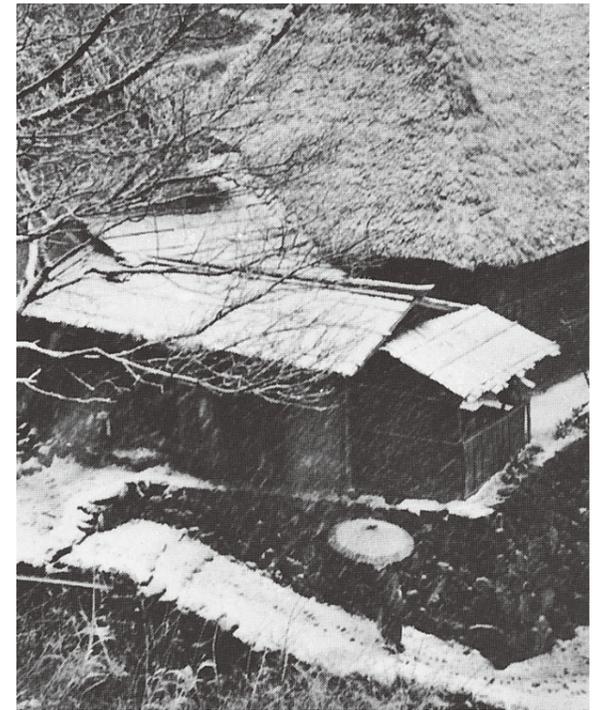


しりょう 資料

おちゅうど 落人のかくれむら

今から600年ほど前、南北朝の戦いに敗れた貞藤左衛門 (南朝方の武士) は、一族19名の者と一緒に、相ノ浦に住みつけました。その子孫が「家持四十八人衆」といわれ、相ノ浦の指導的な地位につきました。また、西ヶ峰や南、林などには、源平の戦いで敗れた平家の人たちが逃れてきて、住みついたといわれています。

昔から戦いや人の世のみにくい争いをさけて、高野山へ逃れてくる人がたくさんいました。それらの人びとの中には、出家する者もいましたが、山やまにかこまれた静かな村にかくれ住む人も多かったようです。



かくれ村 昔の西ヶ峰

おちゅうど 落人  
戦いに敗れて逃亡する武士のこと

てんちゅうぐみ 天誅組と富貴

江戸時代の末、富貴は天誅組の乱に巻き込まれました。天誅組とは、江戸幕府を倒すことを目的とした武士の一団で、1863 (文久3) 年8月、五條代官所を焼き打ちにして、富貴の南東、天ノ川辻に陣をかまえました。これを討伐するため、紀州藩の兵が富貴まで進んできました。9月5日の夜から6日にかけて、天誅組の武士百数十人が富貴に攻めてきて、紀州藩の兵との間に戦いがくりひろげられました。この戦いで、民家30軒ほどと東富貴のお寺が焼かれ、その他の家や田畑も大きな被害を受けましたが、天誅組は間もなく幕府方の軍に敗れました。

天誅組の乱にかかわった地域の人として、沢田実之輔が上げられます。彼は中筒香に生まれ、高野山の寺の小僧からのちに武士になりました。天誅組の乱が起こると、これに食料などを送っていましたが、幕府にとらえられ、京都で獄死しました。中筒香には生まれた家が残っています

じん 陣  
軍隊を配置して、戦いに備えること

## かみや あだう 神谷の仇討ち

1862（文久2）年、赤穂藩（兵庫県）で相続問題が起こりました。藩主のあと目の後見人となった村上真輔を不満に思った吉田宗平ら15人が、真輔とその子らを殺害しました。その後、吉田宗平らは藩をぬけて、長州藩（山口県）の奇兵隊に入りました。



1871（明治4）年2月、黒石吉田宗平らの過去を知る長州藩は、被害にあった人の菩提をとむらうようと、彼ら生存者7人を高野山に向かわせました。吉田宗平らが高野山に向かう途中、神谷の黒石で一行を待ちぶせていた村上一族によって、仇討ちが行われました。

この事件が直接のきっかけとなり、1873（明治6）年、国から仇討ち禁止令が出されることになり、神谷が日本最後の仇討ちの場所といわれています。



仇討ちで亡くなった人の墓所

## さくどう 索道

高野町内には、まだ自動車道路がなかった頃、物を輸送するのに大きな役割を果たしたのが索道でした。

高野索道は1911（明治44）年に作られ、大門から推出（九度山町）までの6.4kmを、1時間20分かけて運行されていました。高野山で使ういろいろな物品だけでなく、霊宝館や金堂、根本大塔などを建てる材料までも運ばれました。1960（昭和35）年、この索道は、高野山有料道路の開通とともに廃止されました。



索道（点検中）

1912（明治45）年、大和索道は、五條市の二見から富貴までをつないでいました。これにより、富貴やその奥地への物品の輸送が便利になりました。

富貴へ日用品や食料品を運んだ索道は、戻るときは、山からとれるいろいろな産物を五條市へ積んで帰りました。その後、この索道は奈良県の大塔村や野迫川村まで延びましたが、昭和時代の初めごろから、トラックの利用が多くなり、索道はだんだんとさびれました。戦後は、自動車の発達で、トラックによる物品の輸送がますます増え、1959（昭和34）年、索道はついに取り外されました。

## 高野山への電車

1898（明治31）年1月、堺東と狭山の間で鉄道が開通しました。これが、現在の南海電鉄高野線のはじまりです。その後、北は大阪の汐見橋から南は河内長野まで延び、明治時代の終わりまで汽車が走っていました。1915（大正4）年、紀見峠のトンネルを電車がくぐりぬけ、橋



高野山駅

本で日本国有鉄道（現在のJR）和歌山線と乗り継ぎができるようになりました。

1922（大正11）年から高野線は南海電鉄の経営となり、1925（大正14）年

に、北は難波から南は高野下まで延ばされました。

1929（昭和4）年には、高野下から極楽橋まで延ばされました。1930（昭和5）年には、極楽橋から高野山へ登るケーブル線も完成して、ついに難波と高野山の間が全線開通しました。



高野山駅と極楽橋駅の間を走るケーブルカー

### ケーブルカー

極楽橋駅を出たケーブルカーは、全長約800m、高低差約320mを一気に登り、約5分間で標高867mの高野山駅に到着します。

1930（昭和5）年、初代ケーブルカーが極楽橋駅と高野山駅の間が開通し、1953（昭和28）年、アルミ合金製の2代目ケーブルカーに置き換えられました。これにより、高野山の人びとや観光客の移動の手段として、たいへん便利になりました。1964（昭和39）年には、日本で初めてとなる2両連結のケーブルカー（3代目）が導入されました。

傾斜の最も急なところは約30度もあり、急こう配を登るケーブルカーとして、日本ではたいへん有名です。ケーブルカーを引き上げるロープの太さは直径5cmで、これは160tの重さに耐えることができます。上りと下り2両ずつのケーブルカーに、満員の客が乗っても、全ての重さは15tほどで、切れることはありません。

仮に、ロープが切れたとしても、4m以内で完全に止まる仕組みになっているほか、いろいろな設備を整えているため、非常に安全な乗り物といえます。

2019（平成31）年に導入された4代目ケーブルカーの車両は、スイス製で2両連結です。流線型の車体に加え、木目調の落ち着いた内装で、



ケーブルカー

「期待感」「癒し・調和」「安全・安心」を中心とした考えをもとに作られています。

このケーブルカーは、国内初の取組となる、「再生可能エネルギー」100%を導入して運行を行うなど、SDGsの達成にも貢献しています。

安心して安全なケーブルカーとして、多くの人びとを運んでいます。

### 高野山と富貴とをつなぐ道

約60年前、和歌山県から高野町と富貴村に合併の勧告がありました。しかし、高野町と富貴村とは距離が離れているため、合併に対し住民から不安の声が上がりました。この合併を進めるための条件のひとつとして、町道筒香線（河合橋～上筒香間）を県道にして、バスが通っても危険がないようにしてもらおうこととした。

高野町と富貴村の町村長、議会、住民の代表らは、合併について何度も会合をもち議論を重ねました。そして、町道筒香線の整備について、県知事から前向きな考えを得られたこともあり、合併を行うことになりました。1958（昭和33）年6月1日、高野町と富貴村は合併し、高野町となりました。

合併後、高野山と富貴とをつなぐ道路の整備は、現状を維持する程度にとどまっていた。2018（平成30）年から、高野町と町議会は、町道筒香線を県道にすることにに関して、県知事に要望を続けました。2021（令和3）年、町道筒香線を県道にすることに県との間で合意が得られ、2022（令和4）年4月、町道筒香線（河合橋～上筒香間）が県道になりました。

今後、高野山と富貴とをつなぐ道路の整備や改良が、さらに進むことが期待されます。



高野山と富貴とをつなぐ道

エスディージーズ SDGs  
エスディージーズは持続可能な開発目標のSDGsとは持続可能な開発目標のことで、国際連合が2030年までに達成を目指す具体的な17の目標を示したものです。その中には、クリーンエネルギーの推進や、気候変動への対策などが含まれています。